様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０３０４

研究課題名（和文）ウェールズ国文学の誕生から見る国民国家形成期における口承の位置づけと民衆観の変遷

研究課題名（英文）Orality, the Folk, and the National Literature in the 19th-century Wales

研究代表者
森野　聡子（ITO-MORINO, SATOKO）

静岡大学・情報学研究科・教授

研究者番号：９０２１３０４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,000,000円、（間接経費）　900,000円

研究成果の概要（和文）：同じケルト諸語地域であっても，民衆の口承文化に民族的ルーツを求めるスコットランドやアイルランドとは対照的に，宮廷詩と写本文化を文学的規規範としたウェールズで散文説話マビノーギオンが国文学として正典化される過程を調査し，ウェールズ国文学観の変遷とその背景にある我々意識について考察した．その結果，アーサー王ロマンスに代表されるヨーロッパ文芸の祖，原ヨーロッパの神話としてマビノーギオンを定義するウェールズ知識層のアイデンティティ・ポリティクスが検証された．ローマの書記文化の洗礼を受け，イングランドとも接触の多いウェールズのナショナリズムが，他のケルト地域とは異なる表出を見たことが確認された．

研究成果の概要（英文）：The aim of this research was to analyse how and whay the canon of the Welsh national literature had shifted from the bardic poetry to the prose tales of the Mabinogion. The pan-European popularity of Ossian, an alleged collection of ancient oral tradition preserved in the folk memory of the Scottish Highlanders, urged the 19th-century Welsh literati to produce the Welsh Ossian which was sought out in the Mabinogion. Thus, these stories were claimed not only as the origin of European romances, but also as a part of the popular tradition of the Welsh people. Yet, contrary to Scotland and Ireland, the folklore did not play a significant role in Welsh cultural nationalism, which focused on the learned, written culture going back to the Romano-British period, and promoted the ideal of the modernised Wales consisting of the respectable working class armed with the English literacy and the Victorian social values.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：ウェールズ　マビノーギオン　国文学　口承文化　写本文化　アーサー王ロマンス　ブルー・ブックス　印欧比較神話

１．研究開始当初の背景

連合王国のケルト諸語地域における民族意識構築を文学的側面から考察する研究が 1990 年代より欧米で進んでいる．バルドの古歌の翻訳・編纂がこれら周縁地域の文化的ナショナリズムを牽引したとして，Katie Trumpener は「バルド民族主義」と呼ぶ (*Bardic Nationalism*, 1997).

これらの研究では，バルドの口承伝統の存続という主張がイングランド啓蒙主義に対する対抗的言説を形成したとするが，地域ごとの動向の違いは見過ごされる傾向にある．

たとえば, 1760 年代に James Macpherson が出版したゲール語叙事詩「オシアン」の英訳は，スコットランド高地に伝わる古詩を収集したという触れ込みで，古代バルドの伝統が 18 世紀の民衆の間で継承されていると喧伝した．一方 1764 年にウェールズ語バルド詩の初の英訳集を刊行した Evan Evans は中世の写本から翻訳した点を強調する．Evans らによるウェールズ語伝統文芸の体系化は「国文学」意識の誕生を促したが，その基盤が当初，知識階級の文化制度である写本に置かれていた点，スコットランドとは事情を異にする．同じケルト語地域であっても，口承文化と文字文化の社会的位置づけや文章語の成立状況の差異が民族意識の表出である国文学観に影響を与えていると考えた．

以上を踏まえ，本研究では主として次の点について明らかにすることとした．

(1) 18 世紀と 19 世紀におけるウェールズの「国文学」観の変遷：

写本に保存されたバルド定型詩を国文学の規範とする 18 世紀から，散文説話「マビノーギオン」が国文学の正典として再評価されるに至った背景

(2) 「国文学」観の形成に果たしたウェールズとイングランドの文化人の関係：

「マビノーギオン」受容におけるロンドン在住ウェールズ人の文芸復興サークル，イングランド古物愛好家サークル，ウェールズのジェントリ・国教会聖職者，非国教会派知識人等の文化的ネットワークの実態

(3) 1847 年の政府教育白書『ブルー・ブックス』によるウェールズ語批判がウェールズ国文学観・民衆観に与えた影響

２．研究の目的

18～19 世紀の国民国家形成時，ブリテンのケルト周縁地域では，「オシアン」に代表されるようなバルド文芸を民族固有の伝統とする認識が民族意識を促す一方，同じケルト諸語地域であるウェールズでは写本に基づかない「オシアン」英訳に懐疑的だった．本研究はこの点に着目し，小説とジャーナリズムという出版の世紀に民族の記憶を「口承の存続＝民衆の記憶」か「写本の存続＝知識層の文化制度」のいずれに帰すかが，文化的ナショナリズムの表出である国文学観に地域差を生んだと考え，ウェールズとスコットランドの国文学形成過程を比較する．また，イングランドとの関係が国文学，ひいては民族意識の定義にいかに関わったかを検証することで，少数言語文化地域のナショナリズム言説編成における地域と中央体制の交渉的関係について分析モデルを提示する．

３．研究の方法

散文説話「マビノーギオン」の受容史を解明することで，ウェールズ国文学制度化と国文学観の変遷をウェールズにおける「我々意識」の変化という大きな社会的文脈において考察した．その際，1847 年の『ブルー・ブックス』発表をターニング・ポイントと考え，

(1) 18 世紀末～19 世紀前半
(2) 『ブルー・ブックス』刊行当時
(3) 19 世紀後半

の 3 つの時代区分を設定した．

研究方法は，主として以下の 3 点である．

(1) ウェールズ国立図書館，カーディフ中央図書館，カーディフ大学図書館所蔵の書簡，手稿，日記等から国文学生成の担い手の活動範囲やコミュニケーション実態を調査：

「マビノーギオン」再評価のキーパーソンである William Owen-Pughe（「マビノーギオン」のテクストを写本より初めて校訂，1796 年から 1829 年にかけて，そのうち 5 編を英訳とともに雑誌で紹介），Lady Charlotte Guest（1838 年から 1849 年にかけて「マビノーギオン」全編を英訳出版），Thomas Stephens（1849 年出版の初の学術的ウェールズ文学史 *The Literature of the Kymry* で「マビノーギオン」をバルドの伝統とは異なるウェールズ民衆伝統として位置づける）について主に行った．

(2) 19 世紀の国文学生成の場となった南ウェールズの工業地帯 Merthyr Tydfil 周辺地域の調査：

南ウェールズにおける鉄道や道路網，出版ルートなどの情報伝播の経路について，当時の地図をもとにフィールドワークを行った．

(3) 『ブルー・ブックス』に対する当時の反応を知るため，ウェールズ語・英語による新聞・雑誌投稿・パンフレットなどの一次資料を収集

４．研究成果

(1) ケルト諸語地域における口承と書承の位置づけ：

ブリテン諸島の中でもローマ帝国の支配を受けなかったスコットランドとアイルランドでは，「オシアン」ブームを契機に民衆の口承文芸が見直され，それが 19 世紀のフォークロア採集や，世紀末のケルト復興における神話・伝説を素材とした文学の登場につながった．一方，18 世紀末のウェールズ文芸復興を支えたウェールズ知識人はローマン＝ブリテンとのつながりをウェールズ人のアイデンティティの一部とし，書き言葉と職業的バルドの宮廷詩を文学的規範に据えた．

口承に対する書承の優位というパラダイムは，『ブルー・ブックス』以降の民衆を主役とするナショナリズム観においても継承され，英語リテラシを備えた民衆の育成がウェールズ近代化につながるという方策のもと，19 世紀後期のウェールズの文化的ナショナリズムは推進されたことが明らかになった．

(2) 「マビノーギオン」受容史の実態：

「マビノーギオン」とは，14 世紀の写本に収められた中期ウェールズ語散文説話 11 編の便宜的総称であり，「四つのマビノーギ」（Pedair Kainc y Mabinogi)と呼ばれる４話以外はお互いに独立した物語であることは研究者の間では周知の事実である．にもかかわらず，「マビノーギオン」各編の受容のされ方の違いについては，これまで詳細に論じられてこなかった．今回の研究では，11 編が同等に評価されたわけではなかったこと，差異の背景には，ウェールズ知識人がイングランドやヨーロッパの文化市場に対して，戦略的にアピールしようとした「ウェールズ国文学」像が存在したことが明らかになった．

「マビノーギオン」再評価の契機はアーサー王ロマンスのルーツをウェールズのケルト的伝統に求める動きであり，これは，19 世紀初頭のロマン主義的機運とあいまって，ウェールズ内外の文化人の要求と合致することとなる．したがって，当初，脚光を浴びたのは「マビノーギオン」の中でもアーサー王ロマンス 3 編だった．一方，現在，中世ウェールズ文学として最も評価の高い「四つのマビノーギ」については，Lady Guest の翻訳以降もほとんど注目されることがなかった．転機が訪れるのは 19 世紀末，インド＝ヨーロッパ語族の比較言語学の進展とともに，John Rhys によってケルト神話として位置づけられたことが発端である．これは，ケルト文化をヨーロッパの始原とみなす「ケルティシズム」言説の始まりである．

(3) 「オシアン」の影響：

Saunders Lewis の *A School of Welsh Augustans, Being a study in English Influences on Welsh Literature during part of the 18th century* (1924) 以来,「オシアン」はウェールズの文化的状況に影響を与えなかったというのが定説となっている．けれども，18 世紀末以降，ピクチャレスク趣味の洗礼を受けた若い世代のウェールズ知識層の間でオシアン的崇高への傾倒が定着していたことが文献資料で確認された．また，「マビノーギオン」評価の背景には,「オシアン」に匹敵する汎ヨーロッパ的価値をもつ古代文学をウェールズが有していることを対外的に喧伝しようとするウェールズ側の文化的ナショナリズムが存在することが明らかになった．

(4) 『ブルー・ブックス』の影響：

1847 年に刊行された『ブルー・ブックス』は，ウェールズ語を母語とする労働者階級の教育程度やモラルの低さを弾劾したものとしてウェールズ民族意識を刺激し，これまでの国教会・ジェントリを中心としたウェールズ文芸復興から，非国教会派による「グウェリン」こと「民衆」のための文化運動への転機を促したというのが定説である．

しかし，『ブルー・ブックス』公刊後の国教会派・非国教会派の知識層の言説を検証した結果，国教会派においてもウェールズ語使用を推奨する動きが存在し，むしろ，非国教会派において民衆の英語教育を推進する動きが顕著に見られる結果となった．また,「グウェリン(gwerin)」というウェールズ語は当時の文献では使用されていないことも明らかになった．敬虔な非国教会宗徒で教養にあふれウェールズ語を話す民衆＝グウェリンという概念は 19 世紀末に誕生したものであるが，20 世紀後半のウェールズ・アカデミズムにおける言語ナショナリズム的風潮のなかで，『ブルー・ブックス』の時代の文化的ナショナリズムの読み直しに使われていることが判明した．

(5) 「マビノーギオン」の翻訳紹介：

2000 年に出版された中野節子氏による日本語訳が絶版となっているなか，一般読者もアクセスできるような訳書が求められている．研究代表者は，「マビノーギオン」受容史の研究と並行してウェールズ語からの翻訳作業を進め，11 編すべてを翻訳し，毎年 2 編ずつ，静岡市の文学講座で解説とともに紹介した．この 10 年間の研究成果を踏まえ，新訳を出版することを計画している．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① Ito-Morino Satoko, Myths and Mythmaking in John Rhŷs's Reading of the Mabinogion, *Celtic Forum*, No. 16, pp. 2-11, Japan Celtic Society, October 2013. 査読有.

② 森野聡子,「ブルー・ブックスの陰謀」がウェールズの文化的ナショナリズムに与えた影響,『ケルティック・フォーラム』第 15 号，pp.22～33，日本ケルト学会，2012 年 10 月．査読有.

③ 森野聡子,「マビノーギ」受容史再考、『ケルティック・フォーラム』第 14 号、pp.54～55，2011 年 10 月．査読有.

〔学会発表〕（計 4 件）

① 森野聡子，インド＝ヨーロッパ比較神話学における「マビノーギ」解釈，第 32 回日本ケルト学会大会，2012 年 10 月 7 日，鹿児島大学.

② 森野聡子,「ブルー･ブックスの陰謀」がウェールズの文化的ナショナリズムに与えた影響，第 31 回日本ケルト学会大会，2011 年 10 月 16 日，中央大学.

③ Ito-Morino Satoko, Who were the supposed audience of the “medieval Welsh Juvenile Tales”?, IXY

International Congress of Celtic Studies, 4 October 2011, National University of Ireland, Maynooth, Ireland.

④ 森野聡子,「マビノーギ」受容史再考，第30回日本ケルト学会大会, 2010年10月10日，西南学院大学.

〔図書〕（計3件）

① 森野聡子，ミネルヴァ書房，伝承物語(Folklore),『改訂版・英語圏諸国の児童文学Ⅰ―物語ジャンルと歴史』，pp.13～18，2013年11月.

② 森野聡子， 鹿児島大学法文学部人文科，マドックの航海―「伝統へのまなざし」の交錯，梁川英俊編,『歌は地域を救えるか：伝統歌謡の継承と地域の創造』，pp.48～58，2013年3月.

③ 森野聡子，三元社，（翻訳）メイリオン・プリス＝ジョーンズ「ウェールズにおける地域振興における文化の役割について」，梁川英俊（編）『＜辺境＞の文化力：ケルトに学ぶ地域文化振興』, pp.42～53, 2011年3月.

〔その他〕

① 森野聡子，文献解題：吉賀憲夫『旅行家トマス・ペナント スコットランド旅行記』（晃学出版，2012 年），日本バラッド協会，2012年8月.
http://j-ballad.com/note/2009-12-29-07-37-52/29-2012-08-12-02-10-11.htm

② 森野聡子，国際会議における招待講演のコーディネート、翻訳、パネル・ディスカッションにおける通訳：
平成 22 年度鹿児島大学特別経費プロジェクト，シンポジウム「ケルト」に学ぶ地域振興，2011年1月29日，鹿児島大学.

③ 「マビノーギオン」に関する文学講座：
- 森野聡子，中世ウェールズ伝承における豚と猪，婦人文学講座，2013 年 11 月20日，静岡市アイセル21.
- 森野聡子,『キルフッフとオルウェン』，婦人文学講座，2013年9月13日，静岡市アイセル21.
- 森野聡子，中世ウェールズのアーサー王物語①「オワイン」，婦人文学講座，2012年9月14日, 静岡市アイセル21.
- 森野聡子，中世ウェールズのアーサー王物語②「ゲライント」, 婦人文学講座，2012年11月9日, 静岡市アイセル21.
- 森野聡子，中世ウェールズの魔法と冒険①『タリエシン物語』, 婦人文学講座，2011年9月9日, 静岡市アイセル21.
- 森野聡子，中世ウェールズの魔法と冒険②『ペレディル』，婦人文学講座，2011 年 11 月 11 日，静岡市アイセル21.
- 森野聡子，中世の夢とファンタジー①「マクセン皇帝の夢」，婦人文学講座，2010 年 10 月 22 日，静岡市アイセル21.
- 森野聡子，中世の夢とファンタジー②「フロウナブイの夢」，婦人文学講座，2010 年 11 月 26 日，静岡市アイセル21.

６．研究組織

(1)研究代表者

森野　聡子　（ITO-MORINO, Satoko）
静岡大学・情報学研究科・教授
研究者番号：90213040